

贅 沢

篠 崎 美 生 子

今年度は、週に五つの学校で働いた。各曜日ごとに違う学校に行くのだから、日替わり定食のようなものである。立ち止まって考える暇もないほどの忙しさであったが、その代わり、タイプの違ういろいろな学生と知り合えたのは幸運であった。自分一人の知恵ではとても得られぬような研究上のヒントが、彼らとのコミュニケーションの中から得られることもある。

そんな収穫の中でも一番大きかったのは、「文学」なんか必要としないで生きている人の多さのに気付いたことかもしれない。私自身、「文学」などという、目立って人様のお役にたつことのない学問を専攻し、お商売にまでしてしまったことを心のどこかで後ろめ

たく感じているものだから、ついつい、「文学にはそれでも、文学にしかできない何かがあるはずですよ。」なんて、学生に同意を求めてしまうことがある。文教の文芸科の諸君は、さすがにうんうんとうなずいてくれなごし、私はほっとするのだが、別の学校の一般教養科目などでこんなことを言うと、「文学なんて、おれにとつてはただの暇つぶし」などと書かれたレポートが出てきたりする。

「それでなんで私の授業をとつたのよ」と叫びそうになりながらも、自分がこれまで、なんのかんのいつてやつぱり「文学」の価値を自明のものだと思ってきたことを思い知らされた気分にもなった。「文学」の価値を至上のものと思ひ、小説を書くために生活を破壊

した私小説の作家の生涯は今見ると滑稽だが、それに似た愚を私は犯していたのだろうか、ちょっと不安にもなる。

が、私が漠然とした不安を抱いているうちに、そんな疑問をもうはつきりと研究に活かしている人が増えてきた。「文学」の言葉は、これまで時代の言説から自由なものであるかのように特権的に扱われてきたが、これからは、そのように「文学」だけを安全地帯に囲い込まず、「文化」の一つとして厳しく見直そう、そしてそれら「文化」を貫く言説を明らかにしよう——、そういう方針に基づく研究である。

膨大な量の参考文献を用いながら、明解な言葉で「文学」を処理していく手つきは、な

んだかとても魅力的だ。これが新時代の文学研究の在り方なのかな、と思いつながら、ただ一つだけ気になることがあった。論者たちの「文学」批判の言葉に、愛情や痛みが感じられないように思えたのである。

もうだいぶ昔になるが、私が学部の子生の頃は、ちょうど研究の主流が作品論からテクスト論へと移っていった時期だった。小説の言葉の向こうに作家像なんか描かなくていいんだよ、と先輩に言われ、おっかなびっくり「三好行雄」を批判してみたりした。「作家像」から解き放つと、小説はこんなに面白い、なんてことを言ってみた。でも、今になって改めて読めば、作品論もそれなりにいいなと思う。作品論の論者も、小説を愛していることでは私と変わらないからだろう。これはこれで、小説のすばらしさを語る一つのやり方だ、という気がするのだ。そして、作品論のような読み方も、そうでない読み方も可能にしながら、しぶとく次の世代へ生き延びていく「文学」って、やっぱりすごい、と私は思ってしまう。

そういう考えが「文学」を特権化しているんだよ、と先に述べたような論者からは叱られそう。それはそうかもしれない。でも、

特権化するのには私の罪、私自身が注意すればいいことで、「文学」そのものが責められるべきではないだろう。「文学」がいかに時代の言説にとらわれているかを論じてもいいかもしれないけれど、「文学」のキャバシテティはもっと大きいんじゃないだろうか。「文学」の言葉は、読みようによっては、それをとらえた（かに見えた）言説を軽やかに乗り越えたり逆照射したりする力をもっているんじゃないだろうか。

……なんて思わずまくしたててしまったが、不思議なことに、言えは言うほど自分が保守的な線り言を述べている気分にはせられてきた。外国文学を専攻する知人によれば、「文学」批判の言説は、今や世界的なブームなんだそうである。私一人波に乗り遅れるのもなんだしな……。

愛を選ぶか波に乗るか、どうもすつきりしない気分になってしまった。こういうすつきりしない気分をとりあえず解消するために、私は眠い目をこすって、深夜のプロレス番組を見ることにした。テレビをつけてみると、ちょうど、ショー的なプロレスを排した格闘技系団体の選手が、伝統的なプロレス団体の選手に挑戦して負けるという、なかなか劇的

な場面の最中であつた。

もう十年以上前だが、プロレスのショー性が盛んに批判され、レスラーもファンも、スポーツライクな格闘技を志向したことがあつた。みんなが「プロレス」嫌いになったのである。格闘技系のレスラーは、かっこよく本当に強そう、一方旧プロレスは因循姑息に見えたものだ。しかし、十余年のうちに、格闘系プロレスリングはその生彩を失い、逆に、旧プロレスの方が、観客本位のプロレス道と格闘技としての強さを両立させることに成功した。プロレスのキャバシテティが大きかつたということだろうか。

格闘技が全盛の時代、旧プロレスの経営者の一人である馬場正平は、こんなことを言っていた。

〈皆さんがプロレスを嫌うので、私、プロレスを独占させてもらいます。〉

そうか——、プロレスを見ながらこの言葉を出した私は、思わずにんまりした。私も「文学」を独占しちゃえばいいんだな。

秋の一夜の、ちょっと贅沢な夢であつた。